

series Salamander in the circle

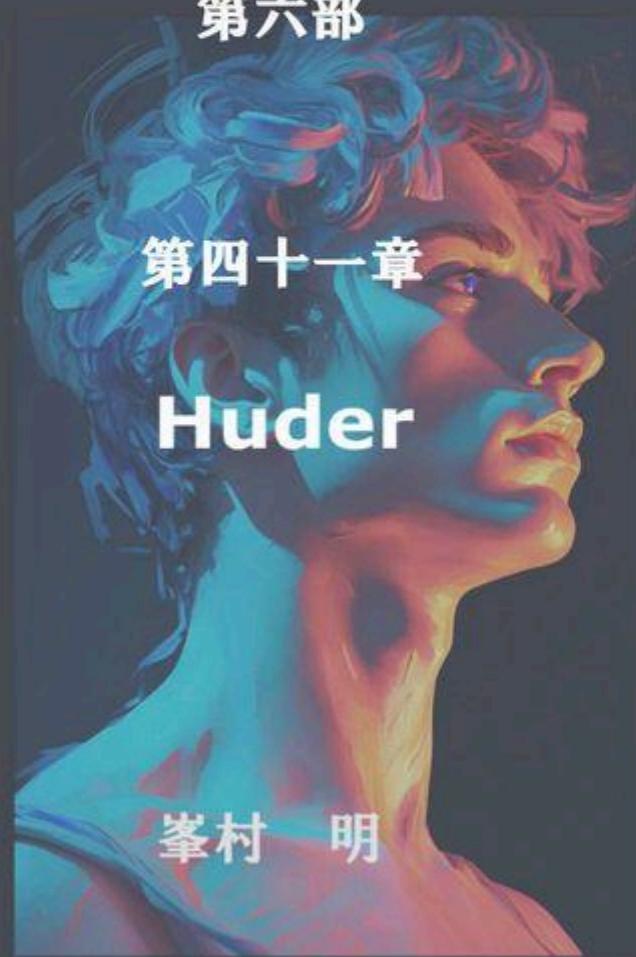
リ・コンストラクション

第六部

第四十一章

Huder

峯村 明



リ・コンストラクション

登場人物

[41· Huder](#)

[377.](#)

[378.](#)

[379.](#)

[380.](#)

[381.](#)

[382.](#)

[383.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チームの医師
ヘルガ	〃
アマセオ	世界の果ての島出身の男
シパド	冥界王の協力者
ベネトナシュ	ミクトランの妖怪・自称『死神』

377.

アマセオはあ然とした。ベネットナッシュが「奥方さま」とすがりつく女性は、ホシナの郷で出会った娘に似ているが迫力がまるで違った。人格的迫力といおうか。それは様々な意味でユミコが積み重ねてきた経験によるものだった。言葉の力だけでミクトランの妖怪を制してしまった。

おかげで難敵だった妖怪は腑抜けたようになってしまい、もはや抵抗する気力も残っていないようだ。

「アマセオさま」とユミコは静かに促した。この者を連れて行ってください、と。

「——待ってくれ！」健は反射的に進み出た。ベネットナッシュは捕獲され、ミクトランへ連れていかかる。ポータルを使って。しかしその後は！？

「ミクトランの住人が、全員が全員、有害なわけではないのだが……あまりに長い期間、汚染され続けた」、シパドは言う。「本来、冥界の王などではなかったお方でさえ、影響を受けられた。人間に至っては何をかいわんや、だ。人間のために浄化が必要なのだ。それゆえ、住人全員がミクトランを立ち退くことになる」

「ならば！ ポータルを閉鎖する必要はないのでは——」

じろり、と、シパドの強い視線に会って、健は途中で言葉を飲み込んだ。

「ミクトランには有形無形の非常に重いエネルギーが渦巻いている。ミクトランは天体の動きと連動し、常に移動している。出口がひとつでもあれば、そこから地上へ噴き出さないとも限らんのだ」

「——イリチヤはどうなるんだ——」健は執拗にイリチヤに言及せずにいられない。

そしてアマセオは事情が呑み込めずにそわそわしつつ、シパドに説明を求めた。シパドからアマセオへの説明は一瞬で済んだ。彼らの間には精神観応のような、言葉が要らない関係があるらしかった。アマセオはとたんに顔色を変えた。

「冥界王さまの？ ご子息が！？」

「いや、皆の衆、さりとて！」アマセオの言葉遣いはところどころ妙に古めかしい。それはともかく、そう言ったきり、彼もまた口をつぐんでしまった。その様子は先刻のシパドの姿に似ていた。なにか重要な事を抱えているのだが、どこからどう表明したものか逡巡している、といった様子……

378.

——大熊座流星群の周期が近づいている、アマセオは逡巡しつつ、そう言った。“その時”、大熊座と地球との間にエネルギーの通路が開かれる。一方通行ではない、双方向の通路である。それを利用してミクランの住人を送り出すのだという。

「そんなことが可能なのか——」

「できる。実際、彼らはそうやって行き来していた。かつてはもっと物理的な方法を使っていましたんだが、科学技術の進歩で移動はもっと容易にできるようになったのだ」

「物理的な方法というと、宇宙船のようなものでは？ 大熊座から大挙して使節団が訪れていた、そうだろう？」

健の問いに、アマセオはそうだ、とうなずいた。「まさしく。よくご存知で」

「ポータルをくぐったイリチヤが、しばらくの間映像を送って来たんだ。その中にそういう場面があった」

「なんと。ミクランの絵を！？」

「例のポータルをくぐった直後からだったから、おそらくそこはミクランだったんだろう、とても……晴れやかで美しい場所だった。イリチヤはそこで『世界の守護者』という称号をもつ男と出会った」

シパドが顔をあげて食い入るように健を見ている。

「晴れやかだったのは、そこが雲の上にあったからだ。雲の下では頻繁に火山が噴火し、天候は荒れ、大陸が動いていた。そういう時代だったのだな。イリチヤはそこで大熊座からやって来た宇宙船……表面は鏡みたいに周囲の状況を映していた……と訪問者を見、太古の転送システムを守る巨人族と会い、『世界の守護者』の結婚とその破綻を見た」

「それから！？」、とアマセオ。健は頭を振った。

「こっちの受信機が壊れてしまった。送られてくるデータが大きすぎたんだ」

シパドはつぶやく。「今のそなたの話からするとイリチヤさまは、『世界の守護者』の、冥界王への変遷を目の当たりにしたことだ」

「まさにそういうことだ。彼は自分が存在する前の父親に会っている」

「ならば——」、シパドは「『冥界王』から『世界の守護者』への変遷をも、目の当たりにしたのではないかな。

あのお方にポジティブな影響力を持つ何か、あるいは何者かが存在したのではないかとは、思っていた。なにがあったのか知る由もないが、なんとなれば、今のあの方は冥界王ではない。もっと別の存在だ」

シパドはアマセオを見、アマセオもシパドを見た。会話はないが、意思の交換が行われている。彼らはじっと見合い、シパドはおもむろに腕組みを解いた。

379.

「ミクランの浄化とは、実は、冥界王様の計画なのだ。

大熊座流星群の今回迫っている周期を逃せば、52年待たねばならない。しかし、それは、無い」

「無い——って——」、とベネトナシュ。

「エンリルが転送システムを復活させようとしている」

その言葉は、金属とも鉱物ともつかない人工的な素材でできたミクランの床を踏んだ者に大きな衝撃を与えた。

「復活だって？ それはたしかに……一部の回路をつなげるのに、アンベレオの神官たちが怪しげな儀式を行って——」

レル・ヴァリスは呟きながら記憶を辿る。彼はアマセオと共にその儀式に忍び込むことによって、アンベレオの王都からメッサナ郊外のルカティマへ移動したのだった。

「エンリルの知能と技術なら直せる。セルンのテクノロジーを弄んでいたくらいだから。そう、やつらの最終的な目的は転送システム復活だ。あのシステムにはこの世界の人間には理解できないような使い道がある。言葉通り、物質を転送するだけではない。アレはエネルギー・システムそのものなのだ」

「ちょっと待ってちょっと待って！！ エンリルのやつら、ミクランへ乗り込んでくるってこと！？」

「ベネトナシュよ、そうじゃない。彼らは乗り込むのではなく、住人を一掃するつもりだ。肅清、ともいう」

その言葉は血を凍らせるような恐ろしい響きを持っていた。不純物の排除。追放。

「冥界王様はそれを知ってそなたらを逃がそうとされているのだ」

「ワタシらは——不純物——」

「エンリルにとてはな。ベネトナシュよ、よく考えるがいい。

そなたらが売った冥界王様はそなたらを窮地から逃がそうとされ、そなたらが陥れた奥方はそなたらの浄化を望んでいる。

一方のエンリルはそなたらを不純物として一掃しようとしている。

「いずれにしてもそなたにはもはや、留まるという選択肢はない。ミクトランを明け渡すことになる。その意味するところは、まったく違う。いかなる意味のもとにミクトランを出ていくか、よく考えよ」

380.

シパドとアマセオが難しい顔をしていたわけが、ようやく飲み始めた健である。

ミクトランは変質してしまう。はたして、その意味は？

イリチヤはどうなる？ ミクトラン、転送システム云々よりも、彼の頭の中はイリチヤでいっぱいだった。彼はふと思い出した。イリチヤ（翼竜）が初めてアデレードに現れた時のことを。真の様子がいつもと違っていた。心ここにあらず、の態、そして、深い眠り。ピアノ——

*

H&L本部で行われた芸術部門夏季講習の最後の講義で、サーディク先生が『音楽の本質』¹というテーマで話をした。

健はひやかし気分で学生たちに混じって聴いていた。

なにげに難しい内容で、正直、よくわからなかった。音楽というのは感情を表現するものだというのが彼の漠然とした認識だったが、どうもそういうものではないらしい。サーディク先生によると、人間は音を肉体で聴いているのではない。靈的部分が"体験して"いるのだ、という。

(へえ——)と思い、十代の学生たちは理解できるんだろうかと疑わしい気持ちだったが、先生は「わかるやつにはわかる」と言うのだった。言外に「おまえ（健）にわかる必要はない」と言われたようでもつかつたものだ。その会話のどこかで先生は言った。

「イリチヤという靈的バイブレーションの物理的表現が真のピアノなのだ」と。

よくよく考える時間もなく、真の誘拐事件やらイリチヤ大ヶガ事件やらが起こって、それきりになっていた。

¹『音楽の本質と人間の音体験』: R.シュタイナー著

この書によると、音楽の本質はそもそも物質界には存在していないという。

幼児の音楽教育にはいくつか段階があるので、早ければ早いほどよいというものではないらしい。真の場合はあくまでフィクションです。

*

(ああ……)

健は独り言ちた。眠りは真とイリチヤのコンタクトの断面、音楽は物質体と魂体をつなぐコネクターのような役目を持っていたのでは……

そして真にまた眠りが訪れ、ピアノを弾く機会を逸したということは……

「シパドさん。アマセオさま。あなた方はベネトナシュをつれてポータルの向こうへ行き、向こう側から扉を閉じてしまう。そうなのですね！？」

シパドとアマセオとは目を見合せた。なにか言い繕おう、という雰囲気ではなかった。ユミコの問いには、事実確認以上のものが込められていた。

彼らはポータルの向こうへ去り、もう戻って来ない。ポータルの閉鎖は何ものも通さない。

それを承知の上で、ユミコは主張する。「あたくしは」、と。「あたくしの生まれた竜門渕家はイリチヤの復活を見守るのが使命でした。永劫にも似た長い長い年月でしたわ。その竜門渕の端に連なる以上、あたくしは今でもイリチヤを守る者としての責任を感じます。ですから——」

「竜門渕さん」強く遮られて、ユミコは口をつぐんだ。

「それは違う。竜門渕家の使命はどうに果たされた。そうであるからには責任など感じてもらっては、困ります」

「桧山さん——でも——」

健は頭を振った。否、と。

「貴女はもう竜門渕を離れたのでしょうか？ 使命も責任も、もはや過去のことだ。もう終わったんだ。貴女にはポルタアウレアの未来がかかっている。そうだろ、エドミール？」

エドミールに否やがあろうはずがないから返事を待つなどいない。健は続ける。

「だから——オレが行きます」

381.

健の宣言に、その場にいた者たち全員が棒立ちになった。誰も、二の句が告げない。

「なんの冗談だ」シパドは絞り出すように言った。

「あたしの話を、聴いてなかつたのか。ならばいま一度言う。何度でも言おう。ミクトランには膨大なネガティブエネルギーが充満している。おまえは、ポータルをくぐってそこへ行こうというのだろうが……バカか。一步足を踏み入れた途端に発狂しかねないレベルのエネルギーが渦巻いているんだぞ。

正気の人間なら、そんなことは絶対に考えんわ！」

シパドの言いようは激しく、ほとんど罵倒に近いニュアンスがあった。

(これだ)とエドミールはこっそり考えた。このシパドこそ、彼の記憶に馴染んでいたシパドだった。他者の反発をかきたてる憎々しさはシパド以外のものではなかった。彼女の語る言葉が隅々まであまりにまともなので、よく似た別人ではと疑わずにいられなかったのだが、本人に間違いなさそうだ。妙な安堵感を覚えるエドミールである。

けれども、健は聴いているふうではなかった。目線を落とし、つとかがみこんで立ち上がると、腕にネコを抱えていた。

「こいつも行きたがっている。こいつの兄弟がイリチヤといっしょにいる。会いに行く、と言っている」

まだら模様のバランケは健に抱えられたままシパドを振り返った。

シパドは誰にも悟られぬよう、息を呑んだ。体長が二メートルを超える巨大なジャガー、輝く赤銅色の肌と美しい筋肉、煙るような紺色の瞳の男。伝説に聞くトルテック族の戦士。スリムな若い東洋人の、魂の姿。

「オレの魂は、行け、と言っている」

382.

彼……レル・ヴァリスがバラムとバランケという兄弟ネコに初めて会ったのはアデレードで、だつた。

まだ子ネコだった兄弟は、クロコダイルのぬいぐるみに牙をむき、あつという間にずたずたにしてしまったのだった。ぬいぐるみの持ち主は「お気に入りだったのに！」と泣き、怒っていたが、そのことを懐かしく思い出すたび、レルは、笑ってしまう。子ネコたちの背後には、トラやライオンをも上回るという強靭な咬合力を備えたジャガーの魂がいたのだから。彼らは相手がぬいぐるみではなく、ホンモノのクロコダイルだったとしてもためらうことなく同じことをするにちがいない。もっとも、それは相手が敵意なり害意を持っている場合だが。メッサナ出身のジャガーは礼儀正しい紳士であり淑女であることで有名だと、メッサナを一度も訪れたことのないレルも知識として知っていた。

魂の力とは如何ともしがたいものだと、改めて彼は思う。桧山健の魂が学者だったとはいえ、潜在的に戦士の能力を備えていたのは、その体つきを見れば一目瞭然で、現生の肉体が魂を表現しようとするのは至極当然のことだった。むしろ、それを止めようとするこのほうが無体というものだった。

だから、健の、「行く」という宣言は、健を知るものにとっては、当然の帰結だったのだった。ただ、その宣言はひとつの現実と背中合わせである——

*

そういえば、ぬいぐるみの持ち主だったマックス・ペイリーはどうしているだろう。あいかわらず化石を掘っているようだが、発掘現場のゴビ砂漠はここポルタアウレアのほぼ真東、オリエントとは地続きである。

「ペイリー？ やつにはイリチヤに乗せてやった」(第19章 Long-term calendar)、とケンが言っていた。

「ええっ。ぼくはまだいちども乗せてもらっていないよ²、たしかエドミールも。なんでペイリーが先なの？？」

「まあまあ。やつはアカデミックな本業のほかに、いろいろと妙なことを知ってるからな。情報提供料だ。それになんたってケツアルコアトルスが大大大好きで古生物学者になったやつだ、翼竜の価値はよくわかる」

「ふーん……なるほどね、ちょっと納得いかないけど」

「ところが、やつ、イリチヤをロボットかなにかだと思い込んでしまってさ」

「え。本物に乗せてもらったってのに！？ 乗っても気がつかなかつたってこと？？」

「ま、常識的にそんなものがこの世界にいるわけないからなあ」

「もったいない！！ なんのために古生物学者やってるんだ！！」

レルは憤慨しつつ、こっそり留飲が下がる思いをし、「次はぼくの番だからね」とイリチヤ搭乗の予約を取り付けたのだった。健からはその見返りを要求され、念のため(予約が完全に遂行されるべく)前払いに応じた。先行投資してしまったわけだ。

相手が財務人間だったことを失念していたのは手痛かった。こういう人間の辞書には『友達のよしみ』という言葉はない。

そういうわけで、なにしろ、イリチヤには戻ってきてもらわないと、元が取れない。健にはそのため命がけで尽力してもらわねばならないのだった。

² ウソ。レルはケストルからエウメロスへの移動中に航空機の外に放り出され、空中でイリチヤに助けられている。

砂浜で眠るまで、鳩はいくつの海を渡らなければならないのだろう?
永遠に止むまで、どれだけの弾丸が飛ばなければならないのだろう?

答えは風に吹かれている。³

紛争と災害は必然的に人間が被害を被る。レル・ヴァリスを幼少時から引きつけて止まなかつたのは、オリエントの地に複雑に刻まれた太古からの歴史だったが、同時に紛争と災害によってきわめて不安定な地域だった。

その地に医師として立つたびに、体内を、あの歌がリフレインするのを感じる。

自由を許されるまで、人々はいつまで生き延びることができるのだろう?
人は振り向いて、どれだけ見て見ぬふりをするのだろう?

答えは風の中に 風に吹かれている

自然災害は致し方無い……もっとも、それは自然ではない可能性がある……。けれども人同士はなぜ争う。争いをめぐる数々の問いに、人は答えられない。ただ、人間はそういう具合にできているのだと自身に言い聞かせる。それはそれでやりきれない見解なのに。

世界を支配している者がいる。人同士を分け、争わせ、人間はそういう具合にできていて、そういうものだと思わせている。

争いは終わらないのではなく、終わらせたくない者がいる。異なる次元、この現実とは異なる階層に隠れている。目に見えるものがすべて、現実と物質がすべてという枠組みの中からは決して見えないところにいる。

³『風に吹かれて』Bob Dylan

答えは風の中なんかじゃなく、そこにあったのだ。

ルカティマ・ポータルはこの世と冥界を隔てるもの。その向こう側はこの世ならざる世界である。
桧山健は今、そこへ赴こうとしている。

41・「 Huder】

[最終章へ続く](#)

あとがき

『Salamander in～』もそうですが、『リ・コンストラクション』には闘争というものは出てきません。敵味方に分かれてどんばちみたいなのはもちろんありませんし、生き残るということ、強い者、正しい者が生き残る、そのために頂点を目指す、栄誉を勝ち取る、そういったことから、H&L財団の“人材育成”活動は関わっていないからです。H&Lは魂の要請に忠実に生きることを目指しています。そこには他者との比較も競争を勝ち抜く構図も必要ありません。

『リ・コンストラクション』開始はほぼ一年前。一年でここまで来られるとは…桧山家のご先祖の話とかゴールドに関することとか、こねるのにけっこう時間かかったものの…なかなか執筆ペースが速かつただけに『出来』はどうだろう？？ 少し間を置いてみないとなんともいえない。で、次が最終章になる予定ですが、どうやって終わらせるのか（終わらせないのか）、もう今回の章から迷ってます。

始まる時はやはりボルテージ高いのです。物語が目の前でひしめきあって、これをこうしてあれはああして、忘れたころに顔を突き合わせて、みたいなシミュレーションでわくわくしてる。少しずつ、物語が収まってくるとエネルギーも落ち着いてくる。自然に終わりが見えてくるもの、なのですが、『リ・コンストラクション』に関しては、どうもよくわからない。

消化不足の部分が…多々…あると思ってます。いったん終わらせて間を置いて改稿することになりそうです。

2026年1月27日 記

奥付

リ・コンストラクション

第四十一章 Huder

2026年1月31日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社